

春日大社所蔵『徳治三年神木入洛日記（中臣延親記）』

藤原重雄

【解題】

日記一。『春日神社記録目録』（一九二九年）では「徳治三年（戊申／自三月十七日至七月）日記」とされ、東京大学史料編纂所では一九八三年にマイクロフィルムによる撮影を行い、写真帳『春日大社史料』七・八 [6170.6547・8] には「徳治三年神木入洛日記」を仮題とし（『所報』一八、一九八四年、一四八頁）、この書名にて先行研究等で引用されている。写真帳は、奈良県立図書情報館でも閲覧可能である。

卷子一卷。全四七紙。前欠で、徳治三年（延慶元年…一三〇八）三月十七日から七月二十一日の記事を含む。上下端にやや虫損があるため閲覧には注意を要するが、比較的原装を残しているため今のところ積極的な修補は行なわれていない（春日大社所蔵の社家旧蔵史料の多くには、近世以来の修補が施されており、それ自体が伝来の過程を物語る）。奥には「徳治三年（戊申）七月 日記之、／神宮預従五位下中臣連延親」と識語がある。自筆清書本とも見えるが、誤記に対して「歟」と傍記し（七月二十一日条）、社司交名の箇所にて若宮神主祐春の前で字間をあけて下げることなどから、鎌倉期に遡る記録・文書の伝存状況を勘案すると、若宮神主千鳥家に伝わった写本であるかもしれない。いずれにしても、春日大社に現在所蔵されている原本・古写本の神事日記のなかでは、最も古い年代のものの一つになる。別に神木動座の記録として、中

臣祐賢の『弘安五年御進発日記』（社二三）がある（永島福太郎『春日社家日記』高桐書院、一九四七年、六四～七〇頁参照）。

本日記に記されているのは、春日神木が京都に動座している最中から、南都へ帰座するまでである。内容は日次の神事日記であり、そのまま別記としての神木動座記にもなっている。記事の相当量は、日々の神事奉仕がつつがなく営まれていることに費やされるが、時折起こる穢への対処のみならず、帰座に向けての政治的な遣り取りや、京都の貴族の崇敬、社司・神人等の間での相論（得分の配分をめぐるものが多いが、神木への供奉が名譽・特権であったこともうかがえる）、そして南都帰座の具体的なありさまが詳しく記され、社司内で廻覧された文書（『鎌倉遺文』未収）が写し控えられている点でも史料的な価値が高い。

この時の神木動座の経緯の概要については、六波羅探題南方であった金沢貞顕（四月六日・七月二十一日条に所見あり）の事蹟をたどるなかで、永井晋『金沢貞顕』（人物叢書、吉川弘文館、二〇〇三年）四八～五一頁にまとめられている（同『金沢北条氏の研究』八木書店、二〇〇六年、森幸夫『六波羅探題の研究』続群書類従完成会、二〇〇五年、も参照）。前年徳治二年の二月二十四日に、興福寺は寺領の近江国鯉江荘民の訴えにより、守護佐々木頼綱の配流と、嘉元三年（一三〇五）に破却した大和国片岡の達磨寺を再興するための勧進僧仙海を流罪すること

などを求め、神木動座（興福寺金堂前の仮屋触穢のため移殿に遷座）した。解決をみないまま年末となり、十二月十二日に木津、同十五日に宇治平等院へ至り、ついに二十日に入洛（法成寺へ着御）した。宇治への動座の際には、官兵として出動した武士が狼藉を働き、その処分も訴訟案件となった。この間の動向は、未刊ながら『中臣祐春記』徳治二年記（内閣文庫本・京都大学総合博物館所蔵勸修寺家本等の写本のみ）にある。年末に神木が京都へ入るのは、正月行事に藤原氏の公卿らが参仕できなくなるため、朝廷側への影響が大きくなるのを狙っている。

本日記の四月十四日条によると、頼綱を流罪とするので、神木を帰座させなければ、大和国の寺領に地頭職を設置するという幕府からの恫喝が、興福寺側に伝えられている。七月二日条には、南都に示された帰座を促す関東事書が写されており、頼綱・仙海は配流された。幕府から遣わされた東使の二階堂時綱・矢野倫綱が朝廷に要求を伝え、実際に南都側と交渉に当たったのは六波羅奉行人の斎藤基任・松田秀頼であった。七月二十一日条には、神木帰座の行列を見物する栈敷が建ち並んだことが記されるが、後宇多院ですら高栈敷は遠慮し、平地に板を敷いた。そうでない栈敷は打ち破ると衆徒からの申し入れがあり、検非違使庁を通じて周知が徹底されたという。

国立公文書館内閣文庫所蔵大乘院文書『神木動座記』・『神木御動座度々大乱類聚』（上野麻彩子・北村彰裕・黒田智・西尾知巳）『神木御動座度々大乱類聚』の翻刻と紹介』『早稲田大学高等研究所紀要』三、二〇一一年）や『古今最要抄』六（礪波美和子）『龍門文庫蔵『春日社家記録』「神木御入洛并御遷座事」をめぐって』『叙説』四〇、二〇一三年）に詳しい記事はないが、本日記と並行する期間の記録として、前田育徳会尊経閣文庫に『公秀公記』自筆本が（徳治三年正月（八月））があり、神木へ参ったことや先の関東事書が写されている（関東事書は異同を注

記した）。

記主の中臣延親は、大東家の出身の社司で、正預を勤めた延秀の二男。この時は五十四歳で、前年十一月二日に氏人三膳から神宮預に補任されている。正中三年（一三二六）三月十日に七十二歳で没した（大東延和『新修春日社司補任記』一九七二年、第一二〇）。

本史料には、大正十五年（一九二六）五月に原稿用紙に森口奈良吉氏によって筆耕された写本が附属し、これを入力した上で、原本にて校正を行った。

翻刻にあたっては、おおむね現在通行の文字を用い、原本の行取りに従ったが（一行に収まらない場合は『を付した』、交名部分については追いついた場合があり、行替わりの位置に『を付した』。社司・氏人については、七月二十一日条の帰座行列のなかに「供奉社司」「中臣氏人」「大中臣氏人」として一覧があり（第三九紙以下）、傍注は省略した。神人についても確実にないため割愛した。重ね書きには左傍点を付し、上に書かれた文字を本文として、下の文字が判読できる場合は、（×）として傍注とした。その他、通例に倣う。

なお紙背に『古今和歌集』冒頭一首のみを記した書きさしがある。

〔付記〕本稿は、二〇一〇～一二年度東京大学史料編纂所・特定共同研究「春日大社所蔵『大東文書』の調査・撮影」（研究代表者・藤原）の研究結果の一部である。ご所蔵者には種々御高配を賜り、宝物殿の松村和歌子氏にはお世話になった。原稿の電子入力には戸瀬昌之氏（東京大学大学院）の、校正には貫井貴恵氏（研究支援推進員）ご助力を得た。記して謝意を表す。

【翻刻】

(前欠、徳治三年三月十七日条)

右不被衆議以前、毎日於中臣氏人者、雖有参勤、可令結番之由被命之間、至于當時上洛之仁如此、又上洛之輩出来之時者、可被書改歟、兼又結番外如本、各毎日從神事之後、可被着例之状如^{〔到〕}性、

徳治三年三月十七日

十八日、御供如例、御幣春仲、散米春増、若宮春名・定春、

社司 泰長 祐親 能春 祐世 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐殖 祐夏 延茂 祐堪 延雅

能泰 祐成 祐文

^{〔行間補書〕}

十九日 御供如例、御幣役北郷、社司祐親・祐世・延親、氏人祐村・祐夏・延茂、

廿九日、御供如例、御幣南郷、

社司 泰長 祐親 祐世 若宮役祐世

氏人 祐村 祐遠 祐堪 延茂 祐夏 能泰 祐成 祐文

廿一日、御供如例、御幣利正、散米同郷、若宮春名・国時、

社司 泰長 祐親 能春 祐世 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐遠 祐秋 祐夏 延茂 祐堪^{當番}

祐成

^{〔泰長〕}

一、今日打敷正預賜之、軾神主給之、若宮祐春打敷・軾給之、

^{〔第一紙〕}

廿二日、御供如例、御幣春増、散米春千世、若宮春名・国時、

社司 能春 祐世 延親 若宮役祐世

氏人 能忠 貞行 祐夏 能泰 祐堪^{當番}

廿三日、御供如例、御幣重綱、散米利正、

社司 泰長 能春 祐世 行忠 延親 祐春

氏人 祐仲 祐臣 祐秋^{當番}、能忠 祐言 貞行 能長

祐夏 祐堪 祐成 祐文

一、今日披露寺状

聖僧御簾事、任先例、急々可被執申、兼又切懸事、同急速可令申沙汰給候、遅々之条以外之由、内々学侶・衆徒群儀^{〔議〕}所候也、恐々謹言、

三月廿一日

別会五師玄親

謹上 神主殿

廿四日、御供如例、御幣春里、散米春富、若宮国次・春名、

社司 能春 延親 祐春

氏人 祐村 能高 祐殖 祐秋^{當番}、能忠 貞行 祐夏

今日寺使者行專房五師繼尹・別会五師玄親兩人、

法成寺阿弥陀堂ニテ、三方惣官并三方神人等召、

罪科人猶以可令免除之处、於当氏之沙汰、罪科^ラ被申

行、就中ニ不被觸学侶^{シテ}、其沙汰何様哉、尤不可然^{云々}、

神主返事、此条傍輩等ニ相触^テ可申御返事云々、凡

条々問答雖多之、難書尽之間、略之、

廿五日、御供如例、御幣重綱、散米利正、若宮国次・国時、

社司 泰長 能春 能賢 行忠 延親 祐春

氏人 祐村 祐仲 祐臣 能高 祐殖 貞行 祐夏

一、今日御供役逆式也、其故能賢遲参、一泰長、二行忠、

三能賢、四延親、

廿六日、御供如例、御幣南郷、

社司 泰長 能春 泰平 行忠 延親

氏人 祐村 祐仲 祐臣 能高 祐殖 祐秋 貞行

祐夏 延茂 祐堪 祐成 祐文

廿七日、御供如例、御幣末守、散米末時、若宮国次・国時、

^{〔第二紙〕}

社司 泰長 能春 能賢 延親
氏人 祐仲 祐臣 能高 延茂 祐堪 祐夏 能夏

延雅 祐文

廿八日、御供如例、御幣春里、散米末春、若宮国次・国時、

社司 泰長 能春 延親 祐春

氏人 祐村 祐仲 祐臣 祐植 能高 祐秋

祐夏 延茂 祐成 祐文

廿九日、御供如例、御幣末時、散米同郷、若宮安氏・清方、

社司 能春 延親 祐春

氏人 祐村 祐仲 能高 祐植 祐夏 祐成 祐文

四月一日、御供如例、御幣春里、末春、若宮安氏・清方、

社司 泰長 祐親 能春 泰平 祐世 延親 祐春

氏人 祐村 祐臣 能高 祐遠 祐植 祐秋

祐夏 延茂 祐堪 能夏 祐成 祐文

打敷・軾如例、打敷大社分三百五十文、神宮預延親

給之、軾二百文神主泰長給之、若宮分打敷・

軾祐春賜之、

二日、御供如例、御幣末時、散米同郷、若宮安氏・清方、

社司 能春 泰平 祐世 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐仲 祐遠 祐植 祐夏 延茂 祐堪

三日、御供如例、御幣春里、散米春富、若宮安氏・国時、

社司 泰長 能春 祐世

氏人 祐村 祐仲 祐臣 祐緒 祐夏 祐堪

四日、御供如例、御幣末時、散米安繼、若宮安氏・清方、

社司 泰長 祐世 延親 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐秋 祐緒 祐夏 祐堪 祐成

第三紙

一、洗米御供備進之、折櫃本ノヲ通用之、

五日、御供如例、御幣延春、散米清秀、若宮春名・国時、

社司 泰長 延親

氏人 祐村 祐仲 祐緒 祐夏 祐堪

六日、御供如例、御幣末時、散米安繼、若宮春名・国時、

社司 泰長 祐親 祐世 延親 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐緒 祐秋 祐夏 延茂

祐堪 祐成 祐文

一、今日檀上三少者小便、引四目可遂清祓之由、加下知

三方神殿守之處、五百文出之、遂清祓畢、火口東

洞院辺者也云々、南郷常住春澄代春富、北郷景 若宮春名、

一、小便祓祭物支配事

合五百文之内

両惣官二百五十文之内十六文、若宮神主殿、

權官二百五十文之内六文不足、加若宮神主殿守二分、

十五文、若宮神主殿、

十八文、常住神主殿守半分、

權神主殿卅一文

新權神主殿廿七文

新葉師權預殿廿二文

八条新預殿十七文

神宮預殿十二文

若宮神主殿卅一文

三方神殿守各十二文宛

德治三年四月八日支配之了、

但此支配之様、末座權官与常住神殿守配分

第五紙

等同之、此条、云傍例、云弘安、背先規候、則雖可被直支配、今度事、最少分可有其煩歟、於向後者、可被任先規之由、正預并權神主仁延親代官延茂問答之処、以外事候、支配事、申付常住候き、向後者可得其意之由、返答畢、

一、當時風聞説云、去比（後宇多）法皇御夢ニ被御覽之様、白帳（張）俗自法成寺トテ持立文院參シテ直可進之由、申入之、仍取之、被經御覽之処、一首在之、

君やかつわれやまゝくるとはてを見よ

三笠のやまにあらんかきりはと在之、

依之以外之由、驚御沙汰云々、大方近日風聞説云、関東ニモ

奇異事等在之間、今度可令上洛東使兵庫頭（長井貞秀）

頓死、又頼綱入道無双者平井去比死去、又南殿（鳥子）
（鳥子）からすこの入道子息頓死云々、

七日、御供如例、御幣延春、散米清秀、若宮春名・国清、

社司 泰長 祐親 祐世 祐春

氏人 祐村 祐緒 祐夏 祐堪

八日、御供如例、御幣末延、散米同郷、若宮春名・国時、

社司 泰長 祐親 祐世 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐夏 延茂（當） 祐成 祐文

九日、御供如例、御幣延春、散米清秀、若宮春名・国清、

社司 泰長 祐親 祐世 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐秋 祐夏 祐成 祐文（九条師教）

一、法成寺壇廻ニ四目引之、依自寺申、（長者ヨリ）

御下知ニテ、執行之沙汰也、（北条貞時）桂相四五也、横ニ竹度之、（渡力）

一、今日或説云、関東相州禅門聊まところミたるに□

（第六紙）

如法老翁一人・童子一人・如毘沙門装束体二人、已上四人令出現給、驚テ目ヲ被開之時、令失給云々、

十日、御供如例、御幣末延、散米利正、若宮春名・国清、次臨時御供備進、（年預權神主時実、役人同、）

社司 泰長 祐親 祐世 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐夏 祐成 祐文

十一日、御供如例、御幣延春、散米清秀、若宮行春・安（氏力）

社司 泰長（東帯、）祐親（同、）能春（衣冠、）祐世（同、）祐春（東帯、）

氏人 祐村 祐臣（當）祐夏（當）延茂（當）祐文（當）

今日打敷・軾如例、大社分共神主給之、若宮祐春賜之、

十二日、御供如例、御幣末延、散米利正、若宮行春・安（氏力）

社司 能春 祐世 若宮役祐世

氏人 祐村 祐秋 祐夏（當）祐文（當）

十三日、御供如例、御幣延春、散米清秀、若宮行春・春道、

社司 能春 氏人、祐村 祐夏 延茂（當）

十四日、御供如例、御幣末守、散米末延、若宮行春・安氏、

社司 泰長（但連參、御罷之時）能春 能賢 若宮役延茂

氏人 祐村 祐秋 祐夏 延茂（當）

一、今日於 殿下御所、寺官被召、顯宗房五師訓英・

琳縁房五師懷豪御問答在之云々、其故者、関東使者

上洛之時定有其聞歟、雖然内々先為意得、被仰

関東評定之趣、於頼綱入道流罪段者、一切無答上

者難治也、其上、猶御帰坐令抑留者、大和国寺領ニ

可被置地頭云々、能々可相計歟云々、

十五日、寺官等下向、

同日、御供如例、御幣春清、散米同郷、若宮行春・安氏、

（第八紙）

社司 泰長 能春 祐世 能賢 延親

氏人 祐村 祐遠當 祐秋 祐夏 延茂 祐成 祐文

一、今朝法成寺假殿ノ御前ニ差筵施入之、敷之其人体不分明、参詣人也、六枚敷之、同日稻荷祭在之、

十六日、御供如例、御幣末守、散米末延、若宮行春・安氏、

社司 能春 祐世 延親 祐春

氏人 祐村 祐夏 延茂

同日、臨時御供備進、奉行時実、今出川殿御調進敷、役人等同、三・四御分引継七・

八臈賜之、次洗米御供備進之、神人給之、

十七日、御供如例、御幣春清、散米春増、若宮行春・春道、

社司 泰長 能春 祐世 延親 若宮役祐世

氏人 祐村 延定 祐夏 延茂

十八日、御供如例、御幣末守、散米重綱、若宮春名等、

社司 祐親 能春 祐世 祐春

氏人 祐村 延定 祐秋 祐夏 延茂

十九日、御供如例、御幣春清、散米春増、若宮春名等、

社司 泰長 祐親 能春 祐春

氏人 祐益 祐村 延定 祐秋 祐夏 延茂 能泰

一、或説云、此両三日頼綱入道一門又三郎死去、

廿日、御供如例、御幣役北郷神人等、

社司 能春 祐春 氏人 祐益 祐村 延定

能忠 祐夏

廿一日、御供如例、御幣春清、散米春増、若宮春名・国時、

社司 泰長 祐親 能春 祐世 祐春

氏人 祐益 祐村 祐遠 延定當 祐秋

能忠 祐夏 延茂 祐成 祐文

(第九紙)

次洗米御供二ヶ度備進之、無御幣之、

一、今日賀茂祭被行之、但藤氏人々無供奉之間、

御幸無之云々、為中檢非違使頼綱入道子息九郎判官關東住

依此事被留之、只在京檢非違使計也、

今日打敷・軾如例、大社打敷祐親取之、軾泰長取之、若宮分

兩物共祐春賜之、

廿二日、御供如例、御幣重綱、散米利正、若宮行春・重末、

社司 泰長 能春 祐世 祐春

氏人 祐益 祐村 延定當 祐秋 能忠 祐夏 延茂

祐成 祐文

次洗米御供備進役人同、神人賜之、御幣無之、

廿三日、御供如例、御幣春清、散米春増、若宮春名・定春、

社司 泰長 能春 祐春

氏人 祐益 祐村 祐遠 延定 祐秋當 能忠

祐夏 延茂 祐成 祐文

次洗米御供備進之役人同、御幣無之、

廿四日、御供如例、御幣重綱、散米長房、若宮、(ママ)

社司 泰長 能春 祐春

氏人 祐益 延定 祐秋當 祐成 祐文

次洗米御供備進役人同、御幣無之、

廿五日、御供如例、御幣春里、散米春廉、若宮春名・定春、

社司 泰長 能春 祐世 祐春

氏人 延定 祐夏 延茂 祐成 祐文

次臨時御供調進、時実沙汰、役人社司神人等同、

廿六日、御供如例、御幣末守、散米重綱、若宮春名・定春、

社司 祐春 能春 祐世 祐春

(第一〇紙)

(第二紙)

氏人 祐遠 祐夏 延茂 能泰

廿七日、御供如例、御幣春里、散米春廉、若宮春名・定春、

社司 泰長 祐親 能春 祐春

氏人 祐殖 祐夏 能泰

廿八日、御供如例、御幣末守、散米末時、若宮重吉・定春、

社司 祐親 能春 祐春

氏人 祐殖 祐夏 延茂 祐堪 能泰

廿九日、御供如例、御幣春里、散米春廉、若宮定春・国清、

社司 祐親 能春 泰平 祐春

氏人 祐遠 祐夏 延茂

卅日、御供如例、御幣末時、散米安繼、若宮役重末・国清、

社司 泰長 祐親 能春 祐春

氏人 祐遠 秀繼 祐夏

五月一日、御供如例、御幣春里、散米春廉、若宮定春・春規、

社司 泰長 祐親 能春 泰平 祐春

氏人 祐村 祐遠 祐殖 祐夏 延茂 祐堪

今日打敷・舳如例、打敷時実給之、舳泰長給之、若宮分祐春、

一、去月廿九日、若宮本社ニ羽蟻出現、仍祐春言之、

一、今夜^一聖僧御前ニ、御簾被懸之、

二日、御供如例、御幣末時、散米^{春與祿宜}重清、若宮重吉・定春、

社司 泰長 能春 祐春

氏人 祐村 祐殖 祐夏 能泰 祐堪

一、今夜ヨリ^{忠教}九条大殿法成寺仮殿^エ七箇夜密々御參、

正面仮屋三三方ニ御簾十間被懸之、床二脚上疊^{銳カ}小口、

二帖敷之、但昼ハ御簾・疊等被取退之、不及御拝、置

御幣也、御師權預祐永代官ニ正預祐親申上之、

(第二紙)

大殿^{御衣冠}、祐親^{御衣冠}、御參之時者、祐親自壇下仮屋ノ丑寅、

角ニ祇候、仮屋ニ御着坐之後、御内ニ參テ祝申之、置御□

間、帰祝無之、神人等皆壇ノ下祇候之、

三日、御供如例、御幣春里、散米春廉、若宮重吉・定春、

社司 泰長 能春 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐遠 秀繼 祐夏 延茂^一能泰

四日、御供如例、御幣末時、散米永重 若宮重吉・宗春、

社司 泰長 祐親 能春 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐遠 延茂

一、同日權神主時実代官時賢与大中社司・氏人等泰長・泰^平・

經清・泰利、於 殿下被召決^{奉行南曹}、種々御問答、所詮

傍輩訴訟無其謂上者、早可随神役之由被仰下云々、

随又加衆徒免除之由、同日未廻、被相触了、

五日、御供如例、御幣春里、散米春廉、若宮春名・国清、

社司 泰長 祐親 時実 能春 祐春

氏人^(マ)

六日、御供如例、御幣末時、散米安繼、若宮春名・国清、

社司 泰長 時実 能春 祐春

氏人 祐村 祐臣 能泰 祐堪

七日、御供如例、御幣春乙、散米春世、若宮春名・国清、

社司 泰長 時実 能春 延親 祐春

氏人 祐臣 祐遠 祐堪

八日、御供如例、御幣役北郷、若宮春名・国時、

社司 泰長 祐親 時実 能春 延親

氏人 祐臣 祐遠 祐夏 延茂 祐堪

九日、御供如例、御幣延春、散米清秀、若宮春名・国時、

(第三紙)

(第四紙)

社司 泰長 能春 延親 若宮役延親

氏人 祐臣

十日、御供如例、御幣利正、散米同方、若宮春名・国時、

社司 泰長 時実 能春 延親

氏人 祐臣 祐夏

十一日、御供如例、御幣延春、散米清秀、若宮春名・国時、

社司 泰長 祐親 時実 能春 泰平 延親 祐春

氏人 祐村 祐臣^當 祐遠 祐夏^當 延茂 能泰 祐堪

次臨時御供備進、^(奉御進)
神主泰長沙汰、南郷御供所進之、

今日打敷・軾泰長賜之、若宮分祐春給之、

十二日、御供如例、御幣末光、散米安景、若宮春名・国時、

社司 泰長 時実 能春 祐春

氏人 祐村 祐臣^當 祐遠 延茂 能泰 祐堪

十三日、御供如例、御幣延春、散米清秀、若宮春名・国時、

社司 祐親 能春 祐春 氏人 祐臣 能泰

一、今日、去年 御幸賞事、弁殿^工驚申之處、被下 院宣了、

去年十一月当社 御幸賞、所被叙正五位下也、

可令存知給之由、^{(隆長朝臣)(×升)}
權右中弁殿御奉行所候也、仍執達如件、

五月十二日 備中守忠種

謹上 春日正預殿

去年十一月当社 御幸賞、以中臣祐文所被叙

從五位下也、^(×所被)
可令存知給之由、權右中弁殿御

奉行所候也、仍執達如件、

五月十二日 備中守忠種

謹上 若宮神主殿○史料編纂所所藏「春
日社旧記」十二案文アリ、

(第一五紙)

十四日、御供如例、御幣利正、散米末房、若宮春名・国時、

社司 泰長 時実 能春 祐世 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐夏 延茂^當 能泰

十五日、御供如例、御幣南郷、散米同、

社司 泰長 能春 祐世 氏人 祐臣 祐村

祐遠^當 祐夏 延茂 祐堪

一、昨日法成寺羽蟻出現、仍言上案、

奏狀一通謹令進上之候、急可有御披露之由、

可令申入給候、恐々謹言、

五月十四日 執行正預祐親

神主 泰長

謹上 宿院御目代殿

言上

事由

右今日未題、法成寺壇上東第四番柱本、羽蟻出

現、仍言上如件、^{五月}

德治三年○十四日 春日執行正預正五位下中臣連祐親

神主正四位上大中臣朝臣泰長

一、依重御尋進狀案、但御占形不被下之、

重被尋下候法成寺壇上出現羽蟻多少事、

重相尋祇候神人等之處、済々現候云々、此上者、

被下御占形、任本社例、社司等可致御祈禱之由、

可有御披露之旨、可令申入給候、恐々謹言、

五月十五日 春日執行正預祐親

神主 泰長

謹上 宿院御目代殿

(第一六紙)

〔行間補書〕
「菅原大僧正御房覺昭崩去、四十四云々、」

十六日、御供如例、御幣利正、散米、在王祿宣、若宮春名・国時、
社司 泰長 祐親 能春 祐世 氏人祐村 祐臣 祐夏
〔第一七紙〕

次臨時御供備進、權神主時実、御幣役等同前、

十七日、御供如例、御幣延春、散米春乙、若宮春名・国時、

社司 祐親 能春 祐世 延親 氏人 祐臣 能泰

一、今日法成寺御殿上、如法令漏給、大方散々也、仍執行方へ

以神人春富相触了、

十八日、御供如例、御幣重綱、散米長房、若宮行春・重末、

社司 泰長 祐親 時実 能春 祐世 延親

氏人 祐臣 祐殖 能泰

一、今日於御前両惣官口論、其故者、昨日執行許へ切懸依

〔通〕
蕙岳漏坐、早可被直之由相触、次ニ御簾・疊破損事。

度々申入 長者候、御下知候者、急可被調進、若又未御

下知候者、重可申由正預申触畢、而此分不可然、御簾・

疊事者、申入 長者之後コソ可申触執行之處、無謂之由

神主申之、正預者、已度々申入候上者、便宜ニ不審何

条事候哉之由返答、如此事互口論也、神主沙汰之次第、不可

然歟、比興々々、

十九日、御供如例、御幣延春、散米春乙、若宮行春・重末、

社司 泰長 祐親 時実 能春 延親

氏人 祐臣 祐殖 能泰

一、長者宣披露之、本社役事、

来廿一日本社御供役社司事、被任申之處、如此被

仰下候、以此趣、可令相触給之由候也、仍執達如件、

五月十九日 辰廻

備中守忠種

〔第一八紙〕

謹上 春日神主殿

明後日廿一日、本社御供役人闕如事、被驚聞○候、食當番

誰仁候哉、嚴密可相催也、又泰平近日住南都候歟、

必可令參勤之由、別可被仰遣候、預方又云、當番之

仁云、南都經廻之仁相尋、急殊可令相催之由、可被召仰

之由、被仰下候也、恐惶謹言、

五月十九日 辰廻

定親

一、如此雖被仰下、猶於泰平者不勤候、仍及闕如之間、雖為違例、

能賢相勞テ令參勤了、泰平不參之由者、時実正役之間、今

度時実党擯出、不可立合役送之由、書起請文之間、不參勤云々、

凡前々傍輩雖令擯出、公所役ニハ立合之處、今度沙汰次第以外ニ

過分之由令乘口者也、

廿日、御供如例、御幣役重綱、散米利正、若宮行春・重末、

社司 泰長 祐親 能春 祐世 延親

氏人 祐臣 祐殖 祐夏 能泰

廿一日、御供如例、御幣延春、散米春乙、若宮行春・重末、

社司 泰長 祐親 能春 祐世 延親

氏人 祐村 祐夏 能泰

今日打敷正預給之、弑神主給之、若宮分祐春取之、

廿二日、御供如例、御幣重綱、散米長房、若宮行春・重末、

社司 泰長 能春 祐世 延親

氏人 祐村 祐臣 祐夏 能泰

次臨時御供備進、權神主時実沙汰、今出川殿御調進、御幣等役同前、

一、正預廻文

和泉国散在神人等訴事、重社解二通副神人解并具書等

進之候、子細見于状候歟、無殊事候者、隨便宣、

〔第一九紙〕

可令加御署給候、恐々謹言、

五月廿二日

執行正預祐親

謹上 神主殿并権官御中

追申

神木御入洛之時、御社領等雜事等事、度々

粗御評定候き、仍社解二通進之候、可有

御署候哉、早々 殿下へ爲進上候也、若宮神主

殿、同可有御署候哉、重謹言、

(約六行分ノ余白アリ)

廿三日、御供如例、御幣延春、散米春千世、若宮行春・重末、

社司 泰長 能春 祐世 氏人 祐村 祐臣 祐夏 能泰

廿四日、御供如例、御幣重綱、散米長房、若宮行春・重末、

社司 泰長 能春 祐世 氏人 祐村 祐臣 祐夏

廿五日、御供如例、御幣春里、散米同方 若宮行春・重末、

社司 泰長 時実 能春 氏人 祐村 祐臣 祐遠 能泰

正預廻文

一、昨日^{廿四日}、自學侶、有群議評定、被命稱、寺訴事

可令成就之由、且風聞候、就之者、遠国其煩候歟、

限三ヶ日路、散在神人等并白人神人等、悉令注進

交名、則雖為何日、神木御帰坐之時者、可令

供奉、^{猶之}前々雖無先例、為奉増神威、可被加下知、

此上若^{猶之}募神威於不參之輩者、後日可有

其沙汰之由、嚴密被命候、專此趣可令存知給候、

尚々交名事、自国他国早々可令注進給候、恐々

謹言、

五月廿五日

執行正預祐親

謹上 中臣社司・氏人御中

追申

若宮神主殿ニハ、直被触申候歟、然而

且可有其御意得候哉、重謹言、

廿六日、御供如例、御幣重綱、散米長房、若宮行春・重末、

社司 能春 延親 氏人 祐村 祐遠

廿七日、御供如例、御幣春里、散米末春、若宮行春・重末、

社司 泰長 時実 延親 氏人 祐村 祐臣

廿八日、御供如例、御幣末、散米末時、若宮行春・重末、

社司 泰長 時実 能春 延親 氏人 祐村 祐臣

廿九日、御供如例、御幣春里、散米末春、若宮春道・国時、

社司 泰長 時実 能春 延親 氏人 祐村 祐臣

六月一日、

御供如例、御幣末守、散米末時、若宮春道・国時、

社司 泰長 祐親 時実 能春 泰平 延親 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐遠

一、法成寺仮殿御簾并敷説等事、以両惣官状言上□

又上漏之間、社司祇候之座無之、則御体もぬれ坐、以

外事也、執行許三可付神人等歟之由、評定在之、

二日、御供如例、御幣春里、散米末春、若宮春道・国時、

社司 泰長 祐親 時実 能春 祐世 祐春

氏人 祐村 祐臣

三日、御供如例、御幣末守、散米末時、若宮春道・国時、

社司 泰長 時実 能春 氏人 祐村 祐臣

一、今夕法成寺本社御分御簾奉懸替之、外二枚計也、

四日、御供如例、御幣春里、散米末春、若宮春道・国時、

(第二紙)

(第三紙)

社司 泰長 時実 能春 祐春 氏人 祐村 祐臣 祐夏
 一、今日社司・氏人座疊被調進替之、
 五日、御供如例、御幣末時、散米安繼、若宮春名・国時、
 社司 泰長 能春 祐世 祐春 氏人 祐臣
 一、仮殿古疊兩惣官賜之、即高麗一帖・紫端一帖者、
 正預祐親賜之、神主同前、高麗一帖、若宮神主祐春取之、
 同日、仮殿上ノ切懸、猶漏之間、於執行沙汰、本ノ切懸ノ上三重テ
 二重ニ差上之畢、
 六日、御供如例、御幣役等南郷神人等、若宮春名・国時、
 社司 泰長 祐親 時実 能春 氏人 祐臣 延茂
 今日勝手并聖僧布留ノ御上ニモ切懸ヲ重之、
 七日、御供如例、御幣役北郷神人等、若宮春名・国清、
 社司 泰長 祐親 時実 能春 祐春
 氏人 祐臣 延茂
 八日、御供如例、御幣延春、散米春松、若宮春名・国清、
 社司 泰長 祐親 時実 能春 祐春
 氏人 祐臣 延茂
 九日、御供如例、御幣末守、散米末房、若宮春名・国清、
 社司 泰長 祐親 時実 能春 祐春
 氏人 祐村 祐臣 延茂
 十日、御供如例、御幣延春、散米春里、若宮安氏・清方、
 社司 泰長 祐親 時実 能春 祐春
 氏人 祐臣 祐夏 延茂
 十一日、御供如例、御幣末守、散米国方、若宮安氏・清方、
 社司 泰長 祐親 時実 能春 延親 祐春
 氏人 祐村 祐臣 祐遠 祐言 延茂

〔第三紙〕

今日打敷・軾神主取之、若宮分祐春賜之、
 十二日、御供、御幣役等南郷神人等、若宮、
 社司 時実 能春 祐春 氏人 祐臣 祐夏
 十三日、御供如例、御幣末守、散米末延、若宮春名・国時、
 社司 祐親 能春 祐世 祐春
 氏人 祐臣 祐言 祐夏 延茂_{當番}
 次臨時御供備進、八条權預祐永沙汰之、引繼テ五・六臈給之、
 一、今日御前氏人坐紫端二帖敷之、合四帖也、高麗四帖、都合
 八帖令敷替了、
 十四日、御供如例、御幣延春、散米春乙、若宮役春名・国時、
 社司 祐親 時実 能春 氏人 祐遠 祐言 延茂_{當番}
 十五日、御供如例、御幣末守、散米末延、若宮行春・安氏、
 社司 祐親 時実 能春 氏人 祐遠 祐言 延茂_{當番}
 十六日、御供如例、御幣延春、散米春清、若宮行春・安氏、
 社司 時実 能春 氏人 祐村 祐遠 祐言 延茂
 次臨時御供備進、_{時実沙汰、今出川殿御調進}役人等同、_{三・四}御供引次四・五臈給之、
 一、勝手神人等執行_{〔設〕}寄責之間、被下 長者宣、被召立事、
 勝手神人等稱鋪説無沙汰、群責寺務云々、不蒙
 本所御免、無左右直譴責之条、事実者太
 不可然、不日可召立、若猶及遲々者可注進交名、
 嚴密可有其沙汰之由、可令下知給之旨、前治部卿殿
 御奉行所候也、仍執達如件、
 二月十六日午廻、 前隱岐守親景
 謹上 春日神主殿
 十七日、御供如例、御幣末守、散米末延、若宮春名・国時、
 社司 能春 延親 祐春 氏人 祐村 祐臣 祐言 延茂

〔第二五紙〕

一、長者宣案、神主申下之、

法成寺鋪説(設)以下替物事、任金堂并木津飯

殿例、可被致其沙汰之由、別当并殿御奉行

所候也、仍執達如件、

六月十七日

備中守忠種

謹上 春日神主殿

仍正預^例相触之處、任弘安之由、万事其沙汰候、可依彼例候、拝領疊等

無左右返進難治之由、返答云々、若宮神主相触之處、弘安之時、一帖

祐賢拝領之間、任彼例拝領候由、返答云々、

十八日、御供如例、御幣延春、散米春清、若宮行春・安氏、

社司 泰長 能春 祐春 氏人 祐村 祐臣 祐秋 延茂

十九日、御供如例、御幣末守、散米重綱、若宮春名・国時、

社司 泰長 祐親 時実 能春 延親 祐春

氏人 祐村 祐臣

次臨時御供備進、時実沙汰、今出川殿御調進、役人等同前、御幣・散米同、

引繼^テ三・四臈給之、

廿日、御供如例、御幣春清、散米春乙、若宮春名・定春、

社司 泰長 祐親 能春 延親 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐言

廿一日、御供如例、御幣末守、散米重綱、若宮春名・定春、

社司 泰長 祐親 時実 能春 延親 祐春

氏人 祐村 祐臣 祐秋 延茂 能春

一、打敷正預給之、軾神主取之、若宮祐春取之、

廿二日、御供如例、御幣延春、散米春清、若宮行春・重末、

社司 泰長 時実 能春 延親 祐春

氏人 祐臣 祐秋 延茂

(第二六紙)

廿三日、御供如例、御幣重綱、散米長房、若宮春名・重末、

社司 泰長 祐親 時実 能春 延春 祐春

氏人 祐臣 祐秋 延茂

一、同日御供之時、長者宣披露之、

当社々司、依不及出仕、所職改補例、祐村注進

如此、無相違歟、一社一同任実正可申之旨、權弁殿

御奉行所候也、仍執達如件、

六月廿二日

左衛門尉俊繼

謹上 春日神主殿

注進 不及出仕被改補當職先例事

祐繼正預、依所勞不及出仕之間、

弘安元年十二月 鷹司殿御代、被改補

當職、以祐貫神宮預、被改補正預畢、

泰隆、依中風所勞、不及出仕之間、

去建久二年七月廿九日、被改當職、以成房被改

補社官畢、但年記相違歟云々、

右、社司等不及神役出仕之時、被改補先例、注進^狀如件、

德治三年五月 日

就之評定之趣、面々記録、置南都之、披見之後、可申

御請云々、此事行忠^{マシ}訴申歟之由、聞風間、行忠令上洛、披申子細之處、

不可有御沙汰之由、被仰下了、

廿四日、御供如例、御幣延春、散米春清、若宮春名・定春、

社司 春長 能春 祐春 氏人 祐村 祐臣 祐秋 貞行 延茂

一、今日付去十七日 長者宣、正預弘安例注進之、

法成寺鋪説(設)以下替物事、可任金堂并木津飯

殿准抛、泰長掠申候歟、相触于權官之處、

(第二七紙)

於法成寺者、兩惣官配分之条、面々日記分明候、
仍一通謹進上之候也、以此旨可令申入給候、
恐々謹言、

六月廿四日 春日執行正預祐親

謹上 宿院御目代殿

注進 法成寺替物兩惣官配分事

一、弘安四年十月六日御入洛、同五年十二月廿一日
御歸坐間事

於法成寺所奉 志津礼御簾以下雜具・疊等事

神主・正預兩方取之畢、但於幕者正預給之、

氏(中臣)人祐興日記(弘安正預祐貫子息、余事略之、)

一、弘安四年十月六日御入洛、

同五年十二月廿一日御歸坐、其後彼雜具等、神主・

正預兩人取之、於幕者、權官等も悉可配分也、正預

先皆取置之、

前正預祐貞日記(中臣)

右注進如件、

德治三年六月 日

一、同日(戊時、)矢野(編輯)加賀守上洛、

廿五日、御供如例、御幣末守、散米重綱、若宮春名・定春、

社司 泰長 能春 祐春 氏人 祐村 祐臣

貞行 延茂 時賢 成藤

廿六日、御供如例、御幣春里、散米末春、若宮春名・定春、

社司 泰長 祐親 能春

氏人 祐村 貞行 延茂 時賢 成藤

廿七日、御供如例、御幣重綱、散米末時、若宮春名・定春、

社司 泰長 祐親 能春 行忠 延親
氏人 祐村 祐臣 貞行 延茂 時賢
一、注進 法成寺内陳御簾并幕等事

合

御簾三間(弘七尺、長九尺、)

幕一帖 五幅、

已上、

德治三年六月廿七日

法成寺内陳御簾并幕等事、注文一紙謹

進上之候、破損過法候、御歸坐以前、急可有申

御沙汰之由、可令申入給候、恐々謹言、

六月廿七日

春日執行正預祐親
神主 泰長

謹上 宿院御目代殿

廿八日、御供如例、御幣春乙、散米春里、若宮定春・春秋、

社司 泰長 祐親 行忠

氏人 祐村 祐臣 祐秋 貞行 延茂 時賢

今日、二階堂伊勢入道 子息(盛綱)参河守上洛、

廿九日、御供如例、御幣永里、散米末時、若宮清方・春規、

社司 祐親 氏人 祐村 祐臣 能高 貞行 時賢

卅日、御供如例、御幣春乙、散米末春、若宮清方・春規、

社司 泰長 祐親 行忠

氏人 祐村 祐臣 能高 貞行 時賢

七月一日

御供如例、御幣末守、散米末時、若宮清方・春規、

社司 泰長 祐親 能春 延親 祐春

(第二九紙)

(第三〇紙)

氏人 祐村 祐臣 能高 祐秋 貞行 延茂
能泰 範泰 時賢 成藤 泰利

二日、御供如例、御幣春乙、散米春里、若宮清方・国清、

社司 泰長 能春 行忠 延親

氏人 祐村 祐臣 祐勝 延茂 時賢 成藤

一、昨日朝日、関東事書 奏聞云々、

同月六波羅殿使者二人、南都へ下向、

斎藤弥四郎左衛門尉基任・松田平内左衛門尉秀頼、

両院家へ参申入稱、寺訴条々御成敗之上者、

急可有御婦坐、次路次狼藉人等事、未被寺注

申、然者追寺申者、急可有糺明、且数百人輩

罷向上者、無左右難治定歟、能々尋究、可有注進

関東、其間経日数事、就惣別以外事也、○頼綱法師

以下被流罪上者、路次狼藉事、不可有子細云々、

仍同二日、学道并僧綱・同大衆等大集会之趣、皆以

先可奉成御婦坐之由、面々一同云々、

今日寺務事、尊光院僧正公寿、拜任、

同日頼綱法師配所へ尾張国へ向云々、仙海（當時関東住、配所参河国へ向く）

則 院宣・長者宣等被成下寺家之間、披露之、

一、関東事書

興福寺衆徒申条々

一、前備中守頼綱法師事

神木御入洛（イナシ）以後涉兩年之間、以敬神（イナシ）之

儀（早イアリ）可處流刑、可為配所尾張國、

一、達磨寺勸進僧仙海事

子細同前、（配所可為イ）可為配所参河国、

一、宇治橋警固輩狼籍事（ズイアリ）

急速尋究可注申、（ハイアリ）

急速尋究可注申、（ハイアリ）

春日神木事、以時綱・倫綱令言上之由、

可令申給候、以此之趣、可令洩披露給候、

師時恐惶謹言、

六月十日 陸奥守平宗宣（大仏）

相模守平師時

進上（西園寺公衡家司三善師衡）左京権大夫入道殿（公秀公記）○德治三年上（日条ニ引ク案文ヲ以テ校ス）月晦

長者宣案 当寺学侶衆徒申条々事、院宣如此、

裁報已無所殘歟、不日可勸神木婦坐之旨、不

廻時剋可令相触満寺給之由、長者宣所

候也、仍執達如件、

七月一日 権右中弁隆長

謹上 興福寺別当僧正御房

追申

婦坐日次、可為来九日、可存知之由、同

被仰下候也、

興福寺学侶衆徒申条々事、関東裁

報無相違、此上者、不日可奉勸神木（進）

婦坐之旨、可令下知之由、

御気色所候也、以此旨急可令申給、仍執達

如件、

七月一日 権中納言定房

（第三一紙）

（第三一紙）

権右中弁殿

三日、御供如例、御幣末守、散米末時、若宮清方・国清、

社司 泰長 祐親 行忠 延親 祐春

氏人 祐臣 能高 貞行 延茂 時賢

一、同日正預廻文

只今^{戊戌}、自衆徒、以中綱慶兼被相触稱、来十二日

寅一点可有御帰坐候、黄衣并白人神人等

悉可参仕、即十一日於法成寺可付着到、若

於不令着到輩者、可被行重科也、且又

依無奉行之下知、不参仕者、付名主可令咎之

由同候也、恐々謹言、

七月三日^{戊戌} 執行正預祐親

謹上 中臣権官并氏人御中

追申

来十一日於法成寺可付着到候上者、

同十日可上洛候也、可有御下知候哉、先日

令申候和泉国九ヶ所神人事、同可

有御下知候也、重謹言、

一、四日南大門内丑寅角ノ柱^七死人足^ラ犬食^テ

置之、辰時ハカリニ見付之、以兩惣官代官氏人祐秋・

成道、殿下御所申入之處、於社家評定^テ以状可

申入之由、被 仰出之間、則神主之宿所^{ニテ}有集会、件

穢物ハヒサヨリ下、ツフ、シヨリハ上ノシ、ムラヲハ、犬食

畢、雖然五ノユヒハ無相違在之、仍可為五体不具穢、

五ヶ日^不可有子細之由評定之間、則此趣申入 長者了、

集会社司、泰長 祐親 能春 行忠 延親 祐春』時実代官時賢

(第三三紙)

長者へ進状

先度所申入候法成寺南大門内五体不具事、

七ヶ日触穢之条、不可有子細候、備進御供事、去

弘安牛死去之時、不被備進候上者、可被任彼

例候乎、以此旨可有御披露之由、可令申入給候、

恐々謹言、

七月四日 春日執行正預祐親

神主 泰長

謹上 左衛門尉殿

爰自鷹司殿件穢事、前神主経茂ニ御尋之處、

不可有触穢之由申之云々、則如此神主之許へ申遣之、

一、経茂状

法成寺五体不具事、如承候者、自膝上無自

股下之骨候云々、五体不具之又^不具候歟、

然者、不可有穢候、五体不具と申候者、手ハ

自肩至于指、悉以相統候、為一体候、雖指一所

落候者、不可有穢候、足以同前候、時に不可

有穢候、弘安五年五月十二日、於法成寺築垣内、

牛令突合、一頭幣損之時者、為死穢五ヶ日、令

穢候了、不可准其例候哉、恐々謹言、

七月四日 前神主経茂

謹上 神主殿

依之同日^{申題}、重有集会、披露之趣、一社評定与

経茂所存参差時之者、明法勘状分旁不審也、所詮

内々^(中原)冷泉判官^章範文^七神主相尋之處、触穢之条、無

子細之由申之、指一ナリトモ其体分明ニ見エハ、可為五体

不具穢、或骨一ナトアリテ^{其体}不見者、不可有穢云々、仍

(第三四紙)

面々退散了、^{四日}御供任弘安之例、雖不令備進、法成寺

用意之間、自御供所、入夜六・七膳能賢・祐敏給之了、

自四日至于十一日七ヶ日、無御供備進之間、無殊事、

一、九日、法成寺内陳御簾被懸之、即置置、社司・神人座被

取替之、仍神主任 長者宣可取之由、北郷常下知、而正預并

若宮神主、當時訴申子細最中上者、無左右不可被取之由、

南郷常住并若宮常住下知、仍以外及相論之刻、神主一人

參シテ不相触中臣社司等、奉懸替御簾、則御正体以下、

悉一身取之、疊皆取之間、希代珍事也、可訴申云々、

一、長者宣案

法成寺掃除料四至内人夫催促事、寺家沙汰

不事行候、申請神人候、急令聞可被召遣之由、

前治部卿殿御奉行所候也、仍執達如件、

七月九日

前隱岐守親景

謹上 春日神主殿

追申

寺家使相伴可催促之由、可令下知給候也、

一、十日、殿下御所へ中臣方社司・氏人等烈參、以執事治部卿

頼房申入、法成寺被取替御簾以下具足、任弘安之例、

而惣官并若宮神主可令拝領之處、就神主掠申入、任木津・

金堂例、一身可取之由、重被下 長者宣之条、不便事候、

早被召返、可任弘安之例之由、可被 仰下候、次内陳御簾事、

專中臣社司等致沙汰事候而、不及中臣方披露、泰長一人

奉懸替之、或諸人施入御正体・絹笠以下、任雅意悉令

取之条、背先規候上者、早可有御罪科之由、訴申入之處、

替物事、所神主申依有其謂、已御成敗之上者、無左右難

(第三五紙)

被召返、次神主一人御簾ヲ奉懸替事、無御存知、急に

隆長可被尋仰之由、被仰出之間、猶種々申子細之處、十二日

御歸坐必定之間、依公私物念重不被申、追可有沙汰云々、

烈參交名 祐親^{衣冠} 祐世^同 行忠^{狩衣} 延親^{衣冠} 祐春^{狩衣}

能春^{選參} 氏人 祐益 祐村 祐仲 祐遠 祐殖 祐秋 貞行 延茂

一、神人疊同神主取之間、三方神人^{訴申}之間、可下行神人之由、御下知云々、

十一日、御供如例、御幣春市、散米延春、若宮国次・春名、

社司 泰長 祐親 時実 能春 祐世 行忠 延親 祐春

氏人 祐益 祐村 祐仲 祐臣 能高 祐勝 祐遠

祐殖 延定 祐秋 能忠 貞行 能長 祐夏

延茂 能泰 祐教^{初參以後、今日始參入、}

大中臣 時尚 範泰 成道 経清 時賢 泰利 成藤 師定 泰国

十二日、御歸坐、先卯初点法成寺ノ後東福院ニテ

衆徒蜂起、其後氏諸卿・寺務・僧綱以下出仕在之、御前

飯屋、十日ヨリ取退之、柱松四本立之、諸卿者御前正面ヨリ

東ニ南北エ床ヲ敷テ着御、僧綱者西ニ同南北エ床ヲ敷テ

着坐在之、九条 大殿今日依為御遠忌日、阿弥堂ノ北ノ廊ニ

着御、辰刻御供備進如例、但樂所參テ音楽ヲ奏シテ

備進、各重裝束、御幣役未守、散米重綱、若宮国次・春名、

御供御罷之後、彼御棚取退之、

其後左大臣殿 御奉幣、説役御師前神主経茂^{東帶}、

御拝之後給テ御前ニ參ス、社司悉出仕、無所之間、氏人ノ中□

祝申之、御幣備進、子息経清、

其後、衆徒自東福院催出テ、京極ヲ下ニ近衛ヨリ南大門ヲ

入テ、池ノ東ヲ廻テ、御前ニ參向、自御前至衆徒前延道

敷之、社司・氏人等、檀^壇下ニ祇候、神人本社・散在白人神人等、

(第三六紙)

(第三七紙)

持御神正面ノ壇下社司・氏人之後ニ祇候、両惣官・衆徒□

前ノ庭上ニ出テ後僉儀在之、沙汰之衆円聖房得業貞英、

詮句、頼綱・仙海等任申請、被流罪之上者、可奉成御

婦坐云々、三ヶ度同ス、路次狼籍事、重急可訴申也云々、仍

社司等御前ニ参ス、出御已廻、役人社司、

一御殿神主泰長御弓未延、御銚長房、二御殿正預祐親御弓清秀、御銚春清、

三御殿権神主時実御弓安繼、御銚時吉、四御殿権預能春御銚春世、

若宮神主祐春御弓行春、御銚安氏、

御簾役 泰平 祐世 能賢 延親 御簾三間被懸之

間、四人參勤之、御出之時、音楽ヲ奏ス、於庭上、左右ノ判官、左朝賀、右忠有、立左右卷ヲ打、御行之時、樂還城、

一、行烈之次第、先陳当宮仕丁二行、白杖二人、次白人、

神人、本神戸辰市、八十人、符坂御油寄人、五十人、次布留明神・

同神人等、次勝手ノ神人等、御幣二流、各染物六切懸之、次神輿、

彼神人等各二行、乱声ヲ奏ス、次国中・并餘江莊上民、和泉国其外御社頭、白人神人数千人、次散在

神人等、次本社神人、次神宝、御弓左、御銚右、次御正体、次社司・

氏人等、次案所二行ニ立テ音楽ヲ奏、二綱、但至于大炊御門朱雀也、各重、装束、

次氏諸卿、○次正権以下僧綱○等、三綱、次聖僧、次大衆三万人、

□、路次事

自南大門朱雀ヲ南エ、中御門マテ東ノソイヲ同中

御門大炊御門マテ、西ノソイヲ大炊御門ヲ西エ京極エ、

京極ヲ南エ三条マテ、三条ヲ西エ東洞院エ、東洞院

ヨリ六条マテ、六条ヲ西エ烏丸エ、烏丸ヨリ七条エ、

七条ヲ東エ東洞院エ、自東洞院九条マテ、九条ヲ東エ万里、少路ヲ万里少路南

河原エ、田中明神ノ北ノ大道エ、稻荷社ノ前エ、（廳）御行如此、自

長者殿下被仰下了、自法成寺至河原道、仰使聴被作之、（浮橋、渡之、

一、社司御体役者、大炊御門朱雀、大炊御門面常葉井殿、
南唐門前ニテ神殿守等ニ交替之、

一御殿末守北郷一鷹、二御殿春市南郷二鷹、三御殿重綱北郷四鷹、

四御殿延春南郷三鷹、若宮春名常住、

供奉社司

神主正四位上大中臣泰長

執行正預正五位下中臣祐親

権神主從五位下大中臣時実

権預從五位上中臣能春

新権神主從五位下大中臣泰平

権預從五位下中臣祐世

次預從五位下中臣能賢

権預從五位下中臣行忠

神宮預從五位下中臣延親

若宮神主正四位上中臣祐春各束帶、

前神主經茂供奉宇治ニテ、東帶、前官出仕今度始、○歟、騎馬之時、當職權官、後最末ニ打了、

中臣氏人

大学助祐益

散位遠実

備前権守祐村南都マテ、之、

祐仲

木工助祐臣（部脱）南マテ、之、

散位能高同、

兵庫助祐遠

修理亮祐勝（又補之）

掃部助祐殖

散位延定同、

祐秋（又補之）南都マテ、

能忠同、

主殿助貞行同、

兵庫助祐緒

秀繼

能長（又脱）南都マテ、

祐夏同、

主殿助延茂

大膳亮能泰

散位祐常

祐敦

能夏

木工助秀能

秀親

祐枝

遠有各淨衣、

此外一鳥居參輩

散位祐言 同祐堪 延雅 祐数

大中臣氏人

（第三八紙）

（第四〇紙）

（第三九紙）

大炊助時尚

越前權守範泰

成道

信濃權守經清

成時

散位時賢

美作權守泰利

成藤（南都マテ）

散位師定

雅樂助經輔（但京二留）

泰國

泰良

散位定繼（宇治ヘ參向、泰之（南都ニテ參向、德治二年八月十七日卒）時兼・經顯（兩人京二留）一、不參社司權預祐永（父重服、舍弟權預祐敏（同重服、

一、社司三条東洞院マテ步行、東洞院面六角防門、

面々乘馬、各房懸之、經茂同、

一、氏諸卿・寺家僧綱等、二条京極マテ步行、自其被用

乘物云々、但洞院按察大納言（美奈、春宮大夫（公顯、僧綱少々（三条東洞院マテ步行ニテ供奉云々、一、申始ニ宇治殿ニ御着、爰勝手明神（飯殿無沙汰之間、樓門ノ東ハシ（西×西）氏人等祇候之間ニ奉擧居勝手神輿之間、

本社無御安置以前奉入之条、不可然、先可奉擧出之

由、自社家下知之処、不事行之間、自南曹并殿度々雖

有御下知、都以無承引、仍以神人沙汰衆ヲ相尋之処、不

別會五師玄親ヲ尋出テ、事次第令申之、度々勝手神

神人等ニ問答、所詮任弘安之例、先可奉擧出神輿、本社御

安置之後、可奉入神輿、尚申子細者、可処重科之由、被下知

間、奉擧出了、其後本社ヲ奉入之、役人法成寺（同、但能）

早出之間、四御殿役祐世參勤之、若宮祐春、勝手問答數

剋之間、庭上ニ立畢、御參諸卿、左大臣殿（應司殿、殿大納言）洞院大納言（美奈、冷泉宰相（為相、高倉宰相（經守、左衛門佐（光經、

權弁、隆長、飯屋ノ後ミソヨリ西ニ着御、

□、布留明神者、樓門ノ東ノ脇壇下ニ飯屋ヲ立テ奉入之、

一、宇治用意物、幕一帖、紫端疊五帖在之、

御供奉備事、御供雜掌与神人相論、雖有種々問答、

以別儀、神人等御供雜掌相共奉備之畢、御供体御入洛之時ノ二同、

御幣未守、散米、打敷国絹四丈、軾布二切、

泰長祝申之、軾布給之、打敷ハ祐親賜之、若宮打敷・軾祐（春乙）給之、

一、御供拝領、一泰長、二祐親、法成寺ニ引繼テ、三祐世、四能賢給之、

若宮祐春給之、其後宇治ヲ出御、衣冠行烈次第同、

役人、泰長・祐親・時実・祐世・祐春、各參勤之、

門前橋上ニテ神人等交替之、以前同、社司等大略自

閑道參向社頭、本社マテ供奉、祐世・延親・祐春三人也、

同十三日、南都ヘ入御、東御門（北）ニテ社司下馬、任例東御門ニテ判官朝葛（光經）打、法乘院西面ノトヲリノ橋ノ東ニ□、左衛門佐（光經）・權弁（隆長）・兩人參向、東北院法印（覺円）、至于

本社供奉、各步行、一鳥居ノ北ノ桂本ニ布留并勝手神輿ヲ

奉擧居、本社鳥居ノ内ヘ御行之時、布留・勝手神輿者、西ヘ

興福寺ノ南大門ニ着御、聖僧者、馬出橋ヨリ御留アリ、本社

南門前庭上ニテ、任例役人面々奉請取御体、南門ノ内ニテ

判官朝葛（光經）打、若宮者、自南門壇上南ヘ御行、散在神人数十人二行、次本社神人、次御（御弓）、次御体、延親・祐臣・祐言・

祐堪供奉、大社者、舞殿西第一間ヲ通テ入御、其後大殿者

幣殿ノ内ヘ入御、（彼料理御座以下、御師權預祐永沙汰、廊下ヲ取渡之、北ニ殿大納言殿、次前中納言（京德）・高倉宰相（經守、左衛門佐（光經）・權弁（隆長）・着座、西小文一帖敷之、法印（覺円）・着座之後、舞殿作間マテ（衆徒）の着座、樂所水垣ノ南庭（二）

六人立テ万歳樂舞之、地久舞之二也、其後以神人春里・景□、(祐カ)
 任例奉安置之由、衆徒へ申了、則衆徒退散了、

一、御神宝者、来十五日御神事ノ次ニ可奉納之由評定、仍
 退散了、其間移殿ニ奉納之畢、

一其後 大殿并 殿大納言殿御奉幣御師權預祐永代官□
九条
 正預祐親參勤、而御方ノ御幣一度ニ結テ樓門ノ下ノ橋ノ□
 祝ヲ申、御幣備進役延親勤仕之、帰祝、

其後神馬八度廻テ給之、其後若宮へ御參、經所へ御着之、祝
 役同祐永代官祐親、末座權官役無之、

一、一御殿分御幣二本兩御方分、河原サラシ懸之、祐親給之、二御殿分二本
 延親給之、大社へ神馬一疋被遣之、三四并若宮御幣・神馬、
 祐永方へ遣之云々、三御殿分、就当番權神主時実給之、

一、今度御帰坐之時、雖無先例、白人神人等令供奉之由、被命之間、(第四三紙)
 若宮神主奉行、符坂御油寄人可奉云々、依之辰市白人
 訴申云、於自余白人神人者、前々已被停止畢、所詮國中

并自余ヲハ不知、於符坂者可被停止之由申之、雖然於今
 度者、以別儀可被召具、於向後者、可令停止之由被下知之

間、辰市神人等供奉了、則於今度者、國中殿原・鯉江庄
 土民・和泉国九ヶ所神人等、參洛交名、別紙在之、而惣官・權官以下、御社

領神人等悉參勤之、於中臣方散所神人以下者、十一日正預宿所ニテ
(命カ)
 付着到了、着到在、別紙在之、國中殿原等種々ニ雖申子細、嚴密被念之間、

各供奉、着淨衣、奉持御櫛之、

一、勝手明神者、同十四日金峯山へ御帰坐、御鎧甲テカイ、スネアテ、
モエキ
 赤地錦直垂、皆具、一乘院家ノ因幡法橋英貞、調進之、衆徒京マテ
ハテ
 奉送之、弘安例云々、

一、十五日恒例御節供備進以後、神宝等奉納之、役人正預祐親

奉開之處、御鑑數剋不開之間、可奉開延親之由、奉開之處、無相違、
 仍御神宝奉納之、次權神主時実、或仁施入トテ小御鏡二面奉
 籠了、 參会社司

泰長 祐親 時実 能春 祐世 延親 祐春
 一、布留明神御鎧甲黒皮、クワカタヲ打、大乘院防官所治部卿法橋良懷、調進之、
 就堺相論、依有訴訟、御逗留、而衆徒・寺家等種々ニ被仰之間、
 十九日帰坐了、

一、廿一日御神事之次ニ法成寺幕二帖内一帖、若宮神主祐春
 取之、今一帖權官等支配之、四丈五幅在之、半疋充二切テ

十切在之、時実・能春・泰平・祐永・祐世・能賢・祐敏
 行忠・延親、九人一切充在之、今一切相殘ヲ二二切テ時実・
 能春取之畢、
(幅、下同シ)

一、宇治ノ幕一帖四幅之内、二帽泰長取之、二帽祐親取之、
 一、御供奉 氏諸卿

公卿

太閤九条殿、南都マテ、 左大臣鷹司殿、宇治マテ、
 按察大納言調院、宇治、実泰、(×卷) 春宮大夫西園寺公顯

中宮大夫公茂、(三条) 花山院大納言家定、(鷹司冬基)
 一条大納言(内經) 春宮權大夫

殿大納言南都マテ、 京極前中納言(中御門)為兼、南都マテ、
 西園寺中納言兼季、 帥中納言(經繼、)
 吉田中納言定房、 別 当(金田)

持明院宰相保藤、 高倉宰相經守、南都マテ、
 冷泉宰相為相、 春日侍從三位顯範、

紙屋河侍從三位顯雄、 左兵衛督(龜定)

参議
実任朝臣
(三条)
公秀朝臣
(三条)

殿上人

参議
実前朝臣
(滋野井)
宣房朝臣
(万里小路)

(第四五紙)

頭兵衛督
為藤朝臣
(三条)

左中弁
公賢朝臣
(洞院)

頭中將
公明朝臣
(三條)

(藤原)
家相朝臣

(高倉)
範春朝臣

(岡崎)
範雄朝臣

(二條)
資親朝臣

(藤原)
教氏々々

右中弁
經世朝臣
(藤原)

權左中弁
隆長朝臣

(四條)
隆頼々々

左少弁
冬定朝臣
(中御門)

(冷泉)
頼定朝臣

藏人右衛門佐
光經

右衛門佐
長隆
(葉室)

(吉田)
冬方

(藤原)
家俊

六位藏人
藤原清氏

已上、

一、僧綱以下

別当權僧正公寿、

西南院法印權大僧都実聰、

花藏房法印權大僧都良憲、

東北院法印權大僧都寛門、

松林院大僧都尊懷、

按察小僧都朝円、

大納言小僧都範宗、

大納言律師顯俊、

春識房
顯範疑講

三綱

權別当權僧正信顯、

松南院法印定聖、

修南院法印權大僧都隆通、

教願房大僧都琳英、

松禪防小僧都訓実、

大納言小僧都重寿、

定禪房律師清賢、

快玄疑講

東門院(擬下同シ)
太政大臣得業良守、

竹林院法印權大僧正乘尊、

浄名院法印權大僧都清憲、

中南院法印玄清、

三位大僧都良寛、

覺乘房小僧都快舜、

中納言小僧都実源、

大納言律師顯昭、

少納言
実延疑講

各法服、平袈裟、
(第四六紙)

上座法眼有舜 權上座法眼実憲 寺主法橋長乘
寺主法橋泰深 都維那圓範 已上、宿装束、
權寺主澄寛 權寺主玄舜 都維那琳乘
都維那実舜 已上法服、平装束、

已上、

一、法皇御殘敷、常繁井殿東向ノ門ニ竹屋ヲ立テ御拜見在之、
(伏見上皇、マタ後伏見上皇モカ)
持明院殿御殘敷、冷泉京極按察殿御局御所ノ門ニ御簾ヲ懸テ御座、
殿下依御輕服、無御出仕、仍御殘敷、祇陀林ノ四足ノ脇被打之、
今出河殿祇陀林ノ北中御門ヨリ北ニ御殘敷被打之、松ニテフク之、
六波羅南方、近衛朱雀ノカ、リ屋ニ殘敷打之、其向東ノツラ
角ニ堂アリ、今度東使殘敷打之云々、凡自近衛朱雀至于
九条、御行道両方ニ無所殘敷打之、而 院殘敷ヲ始テ皆平地ニ
板ヲ敷云々、高殘敷無之、皆以ヲロシ畢、若有高殘敷者、可任法打破
由、兼自衆徒申入 長者之間、以使聽悉被相觸畢、
(聽)

德治三年戊申七月 日記之、

神宮預從五位下中臣連延親

(第四七紙)

【第四六紙紙背】

古今和歌集卷第一

春哥上

年の内に春はきにけり一とせを
こそとやいはんことしとやいはむ
(以下書カレズ)